

氏名(本籍)	池 弘 子 (高知県)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第90号
学位授与年月日	昭和57年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心身障害学研究科
学位論文題目	知能障害児の助詞の習得過程に関する研究
主査	筑波大学教授 医学博士 齊藤 義夫
副査	筑波大学教授 高森 邦明
副査	筑波大学教授 医学博士 長畑 正道
副査	筑波大学教授 教育学博士 福沢 周亮
副査	筑波大学助教授 教育学博士 小林 重雄

## 論 文 の 要 旨

### (1) 研究の意義・目的

臨床的活動において、知能障害児に言語訓練を行う際に問題となるのは、訓練内容と訓練方法である。本研究では、前者にかかわる問題のなかで、文法構造の発達に関する問題がとり上げられた。

日本語の文法構造においてもっとも大きな役割を果たすのは助詞であり、単語を習得し、文となる段階において、助詞はきわめて重要な役割をもっている。しかし、知能障害児の助詞の習得に関する研究は皆無に等しく、文法構造の発達に関する研究の第一歩として、知能障害児の助詞の習得過程を明らかにし、その特徴を把握することは、知能障害児の言語訓練に対して重要な情報を与えることになると考えられる。

したがって、本研究は、知能障害児の助詞の習得に影響を及ぼしている要因を検討することによって、その習得過程を明らかにし、言語訓練に対する情報を得ることを目的として行われた。

### (2) 方法

先行研究および予備的研究(第1実験～第2実験)を基礎に、格助詞「が」と「を」をとり上げ、助詞とともに使用される動詞の種類と助詞が使用される文の種類とによる、助詞の正確な使用と理解の難易の分析を行った(第3実験～第6実験)。また、助詞の習得に関係があると考えられる自動詞と他動詞の分化、助詞の習得と動詞の分化の関係についても検討した(第7実験～第8実験)。

被験児は、絵画語い発達検査による語い年齢が、4歳～7歳11か月の知的障害児、および平均的な発達を示していると認められる対照児、各80名である。

表現は、絵を提示し、表現される部分を歪んで聞き取れなくしてある文を聞かせて、絵と一致する文を聞き取れない部分も含めて再生させることによって行った。また、理解は、4枚の絵を提示し、聞かされた文と一致する絵を選択させることによって、行った。

分析は、文の種類を単位に行い、その単位に含まれる3つの課題文すべてに正答した場合を、その文の種類で正答したとみなした。

### (3) 結果と考察

「が」の習得に関する結果を、どのような状況においてその使用や理解が容易であるかという観点からまとめると、表現の場合、次のようになる。

#### <1> 主語で使用される名詞の種類

「が」との結びつきが強い名詞

#### <2> 述語で使用される動詞の種類

対応する他動詞をもたない自動詞および対応する自動詞をもたない他動詞

#### <3> 場面

いくつかの類似した文で表わすことができない場面

理解の場合、述語で使用される動詞の種類が対応する自動詞をもたないほうが、理解が容易な傾向がある。

次に、「を」の習得に関する結果をまとめると、表現の場合、以下のような状況において、正確な使用が容易な傾向がある。

#### <1> 目的語で使用される名詞の種類

「を」との結びつきが強い名詞

#### <2> 文の種類

「を」以外の助詞を使用すると非文法的となる文

理解の場合、容易である要因は見い出されなかった。

また、知的障害児群と、語い年齢によりコントロールされた平均的な発達を示す対照児群を比較すると、知的障害児群が、助詞の習得が遅れることが明らかになった。これは、知的障害児群は、助詞の習得において重要である記憶と抽象の能力が劣っていることによると考えられた。また、知的障害児群は名詞と助詞の結びつきが強いことが指摘され、これは、助詞の習得の初期の段階で生じる現象であると考えられた。

「が」と「を」の習得に関する結果をもとに、助詞の習得一般について検討すると、次のようになる。

助詞の習得過程として、表現の場合、まず、名詞との結びつきが強い段階、次に、動詞との結びつきが強い段階を経て、助詞の表わす関係を正確に把握するようになる過程が考えられる。そして、知的障害児は名詞との結びつきが強い段階に長くどまっていると考えられる。また、この習得過

程から、助詞の習得においては、助詞とともに使用される名詞および動詞が重要な位置を占めていることが推測される。なお、理解においては、一般的な助詞の習得過程として推測できるような結果は得られなかった。また、表現と理解の関係については、一定の関係はなく、文の種類や助詞の種類によって異なることが指摘できる。

また、自動詞と他動詞の分化の過程を分析した結果、表現の場合、まず一方のみで代表し、その後分化する過程、理解の場合、まず自動詞的または他動詞的にとらえ、その後分化する過程をたどることが推測された。

動詞の分化と助詞の習得の関係は、表現の場合、分化が早い動詞を含む文では助詞の習得より動詞の分化が早く、分化が遅い動詞を含む文では被験児により異なるという結果が得られた。また、理解では、両者に差がある場合、動詞の分化が早いことが示された。

本研究では言語訓練の内容にかかわる問題がとり上げられたが、知的障害児に効果的に助詞を習得させるための訓練方法に関する示唆も得られた。それらは以下の点である。

- 〈1〉 視覚刺激を利用する。
- 〈2〉 手がかりを提示する。
- 〈3〉 助詞に関する誤った仮説を訂正する機会を早く与える。
- 〈4〉 同じ規則をもつ言語サンプルを連続して与える。
- 〈5〉 反応に対する正誤の即時のフィードバックを与える。

## 審 査 の 要 旨

本研究は、知的障害児教育にとって重要な位置を占める言語指導において、その中心にある助詞、とくに格助詞について、その習得過程を、使用と理解に重点をおいて、実験的に究明したものである。そして主として語い年齢 (VA) をマッチングさせた一般児童 (正常児・対照群) との比較において、知的障害児 (実験群) の格助詞の習得の過程を検討した。

こうした領域における先行研究は皆無なので、本研究のように助詞の習得過程を詳細に研究したものは、それだけでもユニークな研究であると、高く評価される。その上、本研究の結果は格助詞を含む機能語の習得と活用に著しい困難性を持つ知的障害児の言語訓練に当って、その訓練プログラム作製に多大の貢献をなすものが含まれているという点で、価値ある研究であると評価される。

しかし、本研究は一般児童と知的障害児群とを語い年齢や精神年齢 (MA) でマッチングさせた横断的な研究である。今後の展開的研究は、障害児の助詞習得の過程を継年的に追求する縦断的アプローチによって補強されることが必要であろう。また「が」と「を」以外の助詞を含めた機能語の習得過程をも追求し、障害児教育の科学的基礎資料を提供されることを望んでやまない。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。